

ドイツ語リフティング事始

－ドイツ語構造理解へのヒントと仮説－

Die Anfänge des Denkjonglierens beim Deutschlernen
－ Tipps und Hypothesen zum Verständnis für die Struktur der deutschen Sprache －

宮永義夫
Yoshio MIYANAGA

ドイツ語リフティング事始

ードイツ語構造理解へのヒントと仮説ー

Die Anfänge des Denkjonglierens beim Deutschlernen

ー Tipps und Hypothesen zum Verständnis für die Struktur der deutschen Sprache ー

宮 永 義 夫

Yoshio MIYANAGA

1. 序論：ドイツ語リフティングとは何か

「ドイツ語リフティング」は、筆者の造語にすぎないが、この場合の「リフティング」は専らサッカーのそれをイメージしている。最も過不足なく、簡便な説明だと思われるコトバンク（デジタル大辞泉）によると、「サッカーで、手以外の体の部分を使って、ボールを地上に落とさず打ち上げ続けること」とある¹⁾。「ドイツ語リフティング」は、対象たるドイツ語をボールに喩えている。「地上に落とさず」とは、ドイツ語の様々な現象（即ち、ボールの位置や動き）が変化しても、それを別々の切り離されたものとは見なさず、滑らかに連続する、一体のものとして捉え続ける構えと、それを目指す訓練という意味になる。また、ゲームに相当する、ドイツ語による実際のコミュニケーション実践との関係において、副次的に見えるという類似からの発想ではあるが、その重要性についてはいささかも揺るがないという信念がある。

筆者は言語学習を10の相で考えている：

- 1) 異文化を受け入れる開かれた心を養う訓練（しつけ）
- 2) 言語を取り巻く自然（風土）・文化・社会 {言語環境} を理解する訓練
- 3) 言語構造を理解する訓練
- 4) 言語運用を理解する訓練
- 5) 言語を運用する訓練
- 6) 語られた（書かれた）内容を理解する訓練
- 7) 語るべき（書くべき）内容を獲得する訓練
- 8) 語る（書く）人を全体として理解する訓練
- 9) 自らの語る内容と行為が及ぼす影響を理解し、配慮する訓練
- 10) 言語使用が最終的には、争い、滅びへと至らしめる道具ではなく、融和、協力、生き延びるための道具となるように努力し、配慮する訓練

この10の相は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能とは、個別的にはなく、ほぼ複合的に対応している。1) は、あらゆる言語学習を可能とする前提である、世界観、価値観の訓練である。従って、1) が最初に来ると言っても差し支えないが、その後は内容の程度に差があるものの、難易度に還元できるようなものではなく、むしろ同時並行的に、あるいはまた、1つの作業がいくつもの相に跨がっているものとして行われる。更に後の項目の訓練によって、言語学習を促進する価値観、世界観を獲得することもあるのであって、ようやく1) に到達するということもあり得ることである。

2) 3) 4) 6) 8) 9) には「理解する訓練」という文言が含まれている。「理解した結果」は「知識」

に他ならない。言語学習は元来、技能(スキル)であるから、「得た知識」を応用する訓練が必要であることは論を俟たない。しかし、その前提として、「知識を得る」ための訓練が必要である。この「知識を得るための訓練」こそ、対象を個別に切り離して、開始終了を繰り返すのではなく、筆者が「リフティング」に喩える、連続して扱える技が必要なのである。

そもそも外国語学習は他者理解である。他者は自己でないものであり、外部にあり、異なるもの、理解し難い存在であるからこそ他者である。自己の言葉は母語(あるいは自言語・内言語)であって、他者の言葉は非母語(あるいは他言語・異言語・外言語)としか言いようがない。外「国」語というような制度に関わる事柄ではない。英語は事実上の世界共通語という地位を獲得している。そして、確かに濃度の差こそあれ、英語を母語とする人々も多くいる。しかしより多くは英語を母語としない。たとえ、世界共通語を使おうとも、言語学習の要諦は、相手を理解しようとすることであり、それはすなわち相手の母語を「知ろうとする」ことである。言い換えれば、言語学習の究極の形そのものが「知識を得る訓練」である。

5)に、我々が一般に言語学習の訓練としてイメージする、総合的な応用訓練が集約されている。6)は「聞く」「読む」、すなわち言語使用の大きな目的である「知識の獲得」そのものである。7)は「話す」「書く」の発信の前段階の訓練である。8)は「聞く」「読む」の目指す総合的な他者理解である。9)10)に至ると、言語行為は即ち人の行為であって、行為の規範は倫理である。そして、行為は善さに基づかなければならない。それにはやはり知識が必要であるし、「善さ」を獲得する訓練も、広く言えば言語学習に入る。中心にあるのは5)の訓練だが、そのベースにある3)と4)が特に重要だと考える。その内4)は「訓練の方法の知識の獲得」であって「いかに」の問題であるが、3)が最も基本にある「何であるか」である。言語構造とはひと言でいえば文法のことであるが、一般には5)の相のこととして文法が扱われている。あたかも所与のものとして文法がそこにあって、それを訓練する。その手前に、文法という構造を理解して、知識を得るための訓練がなされなければならない。そのことがすなわち、他者の言葉を知る(他者を理解する)ことそのものである。

2. 強変化動詞の命令形

(1) 動詞の登場以前

初級教科書においては、挨拶を導入とすることが多い。初心者がまず目にし、口にする言葉はGuten Tag!である。この中に、音韻の問題と、文法として、形容詞+名詞の名詞句という形態論、統語論上の構造が含まれている。そのことに目配りをしなくてはならないが、単に無味乾燥な格変化の訓練ではない。そもそも、このドイツ語表現と、その意味として理解するであろう日本語の「こんにちは」との間に、表面上は何の関連もない。学習の広がりを持たせるためには、“guten Tag” = 「こんにちは」を脱して、まずはgutenとTagそれぞれの世界があることを予感することが重要である。

日本語との関連では、「ローマ字読み」という「コツ」も侮れない。これは日本語の音韻を安易にドイツ語に当てはめることを意味しない。「かな」が基本的に持つ子音+母音の構造が、ドイツ語の音節構造に原則的に合致していることを応用しているのである。ただし、このような記述にたどり着くのは訓練の結果、知識を得たからであり、もどかしくも、説明はできないながら、そのような予感と仮説を持つことが期待される。仮に、gutenが日本語のローマ字であるとするならば、gu-tenと分解するのが最も自然であり、「ぐてん」と発音されるはずである。更には、個々の音韻の差異、母音の長短などを知る必要があるが、少なくともそのフィールドにいる、いわばすでに土俵にのっている実感がある。

望むらくは、もしリフティングのように、継続して学習、あるいは思考を続けて行くとすれば、「なぜ、ドイツ語ならば、すでに土俵に上がっている感がするのであるか」という問題提起が出て来るのである。

一方で、gutenが英語のgoodに対応するgutの一形式であることを形容詞の格変化までお預けにする必要を認めない。格変化は文法項目の言わば単元として孤立して存在するものではない。guten Tagは明らかに2語であって、それぞれに意味があり、gutenとは何か、Tagとは何か、ということが当然視野に入るべきである。gutenはgutの変化形であるということになれば、gutenの構造はgut-enである。gutenは音韻によって分解したもの、Sprechsilbe「話音節」「音綴」であり、gut-enは語の構造によって分解したSprachsilbe「語構成音節」「語綴」と呼ばれるものである。両方の分綴点をともに示せばgu-t-enになるが、子音tは単独では存在出来ないから、むしろ、切れ目が弱い。要素がただ順番に並んでいるのではなく、組み合わせあって接合している[gu{t}en]のではないかという仮説に至ることが出来る。

(2) 動詞の登場

そのまま“Guten Tag!”のような挨拶を発展させるのであれば、形容詞+名詞の名詞句を深化させることになるから、格変化への考察が視野に入ることになるが、表現の自由度を上げることが優先されるとすれば、「文」を早くに登場させたい。語彙は所与のものであるし、句を構成するための選択肢も限られている。「文」といっても、その殆どは定型の「言い回し」であって、その型に語彙をはめて行く作業になるが、文に至って裁量できる要素が格段に大きくなる。「文」に必須なのが動詞である。それ故、文法部門では、形態論の当初に動詞を扱うのが一般的である。挨拶の延長上として、定型表現のWie geht es Ihnen/dir?、人称変化の初めとして例えば、Ich heiße～などが登場する。

早い段階で、学習者は動詞の「活用」の根本をなす「人称変化」の洗礼を受けることになる。名詞系列の「曲用」、すなわち「性数格変化」との間との連関が失われていなければ、「数」すなわち「単数」「複数」という見かけ上の共通項があることが分かる。人称変化は、特に英語から類推すると、人称代名詞が担っている印象が強い。人称代名詞に合わせて動詞の語尾を変化すると捉えると、3人称単数にはer、sie、esの3種の人称代名詞（主格）があり、ずれがある。勿論、3人称代名詞は名詞の性を写している。表面的に考えれば、人称変化は性とは無関係であるというに過ぎない。もう少し思考を延長すると、1・2人称にも、性は考えられ得るが、代名詞にも反映されていない。更に名詞は3人称であって、1・2人称は代名詞のみの世界である。当然のごとく聞こえるが、性は本来的に名詞には備わるが、代用形としての3人称代名詞には担当として性別を表すことはできるが、「代名詞そのものに性別はないのではないか」という仮説にたどり着くことができる。1・2人称の代名詞は名詞の代用形ではないので、言語外的には性別を有する存在を指している、その区別はできない。これは、あくまでも現在のドイツ語における現象であって、言語に普遍妥当するかどうかは埒外である。

3人称単数の3種の代名詞は例外的現象であるから、この点からも人称は代名詞が主導するものではないという認識を得られる。名詞も3人称に固定されているものであるから、人称とは自ずから動詞に発するものと言うことができる。言語の存在は発話者を必要とする。発話者には内部と外部（外界）がある。発話者の内部が1人称であり、あらゆる言語行為は1人称を前提としている。1人称の発話者の外部が3人称である。その外部から特定の受信者（言葉の宛先）として立ち現れて来るのが2人称である。

名詞系列(即ち3人称)においても、単数/複数は様々な疑問を呼び起こす。少なくとも現在のドイツ語においては、性は単数においてのみ区別され、複数においては混交して全性共通になる。このことは性数を1つのカテゴリーにまとめられる可能性を示唆する。と同時に、代名詞や冠詞類に見られる女性と複数の共通性が目に付く。ちなみに、男性と中性にも共通性があり、中性と女性は全く重なる所がない。

名詞の複数形は、同種のもの集合体であるが、動詞人称体系における複数はそうではない。そもそも話者は1人であり、1人称複数とは、ichの複数ではない。言語は発話者の内部と外部に跨がって存在するものであるから、1人称は、いわば本質的に内部と外部を持つ、という言い方ができる。外部は2・3人称である。すなわち、1人称複数(wir)とは1人称(本質的単数)+2人称/3人称である。

3人称の場合、名詞の複数形を備える言語においては、均質な要素の集合体という観念を持ちやすいが、本来の複数概念を持たない日本語の話者にとっては、「～ら」「～たち」「～ども」などの複数語尾によっても、均質性の感覚へ至ることに困難を感じる。それ故かえって、複数の質の差異については敏感である。3人称複数とは、個別の差異を捨象した要素の集合体の他に、焦点となる3人称単数があるかどうか、ある場合には、その周囲の集合体が均質的であるかどうかの種別がある。複数に対して焦点を当てることも可能であり、複数であるならば、必然的に均質性に差異がある。

発話は一般に宛先(受け手)を必要とする。外界はおしなべて3人称性を帯びるが、その中の焦点が合う要素こそ2人称へ転換する可能性がある。2人称は、3人称と同様、複数における要素の均質性が問題となる。2人称複数とは要素が全て均等に2人称であるか、ターゲットとなる2人称単数あるいは均等/不均等な2人称複数に3人称単数あるいは均等/不均等な3人称複数を加えたものということになる。複数形には、可能性として、2人称においても3人称においても、均等なもの不均等なものを設定したが、考え方によっては、2人称は必然的にターゲットになるわけであるから、複数としては均等にならざるを得ず、不均等な2人称とは、2人称単数+均等/不均等な3人称に他ならないといえる。前述のように、1人称複数とは、様々な2人称/3人称に絶対的な1人称単数が加わった人称であり、2人称複数には種々の3人称が加わる可能性がある。

動詞の人称変化は1~3人称に単数/複数の種別があるわけであるから、6種類に区別されればよい。ところが多くの学習者が経験している英語の人称変化は、現在時制において、大多数の一般的動詞は、3人称単数に語尾が付加されているのみであり、原形不定詞なるものを変化形に加えても2種の区別しかない。おそらくは3人称単数が人称変化の最後の痕跡と呼べるようなものであって、鍵となる人称であろうとの想像はつく。たしかに古典語代表としてラテン語を見ると6種に変化している。6種の人称変化は歴史的産物であって、ある段階の表示である。名詞系列に繋がる人称代名詞によって、3人称における性別が加わることによって、ある意味で精度が増しており、それ故、代名詞依存が強まったと考えられる。

6人称数体系というものが表面的な現象に過ぎないとすれば、その活用形が絶対的な6人称数原理に基づく歴史的変容の姿と考える必要はない。それは例えば1人称複数語尾-enと3人称複数語尾-enは本来違うものであるという留保を付けなくてもよいということの意味する。歴史的伝統的に6人称数体系があり、更に確かに語の性質は異なる。従って区別はある。しかし、動詞の、少なくとも形式

においては融合しているという発想が許されるのである。

その発想で、動詞の人称数変化を眺めてみると、多くの一般的動詞においては4種の活用形がある。不定詞／1人称複数／3人称複数＝-en、1人称単数＝-e、2人称単数＝-st、3人称単数／2人称複数＝-t。すなわち、1人称単数、2人称単数は単独で、その他は2つに纏まっている。これを人称変化の捉え直しにまで拡張する必要はないが、このようなところに思考継続の契機がある。単独の1人称単数、2人称単数が独自の形になることは、前述のように、発話者、受け手として、言語行為において、本質的な、表層には現れなくとも、深層には必ず存在する要素であることから、理解が容易である。共通している3人称単数・2人称複数間に人称数の一致はない。歴史的にも異なる形を取っていた。しかし、表面的な形の融合が起こっているということは、3人称単数・2人称複数間においては、厳格な区別は失われていると言うことができる。別の例を挙げれば、Maulwurf「もぐら」のMaulの部分、現在のMaul「口」ではなく、古高ドイツ語のmu「土」に由来する。しかし、現在の形は「口」と同形になっており、語源的に異なるとはいっても、同形語として関連してしまう。残る区別は-enと-tであるが、原点は不定詞である。不定詞の-enから、1・3人称複数の同質性と、-tである3人称単数・2人称複数に分けるものはなにか、というところに考察は進むのである。

動詞の人称数変化の学習では、すぐに様々な不規則に遭遇する。arbeitenのような基本的動詞において、まず「口調のe」の登場となる。これは主にarbeit-en、find-enのような、語幹の最終音がtやdであるもの、atm-enのような動詞であれば、込み入った説明であるが、語幹の最終音がmかnであって、その前がl、r以外の音であるものと条件づけられる、母音の必要によって、曖昧母音のeが挿入されるタイプである。この点において、指導上欠けがちであるのは、不定詞／1人称複数／3人称複数の-enのeも「口調のe」に他ならないことである。handeln、wandern等の、-el-n・-er-n型変化へ継続させなくてはならない。まず、ドイツ語は曖昧母音の連続を嫌う。語幹側に曖昧母音の末尾があり、語幹終端がl、r、である場合、前述のように、nならば連続できる。本質的に語尾は-nであると考えるのが妥当である。

nは有声鼻音であり、発音されるためには、前に母音あるいはl、rを必要とする。その条件が満たされなければ、口調のeを伴って、-enになる。atmen「呼吸する」を例とすると、関連する名詞としてAtem「呼吸」がある。動詞（不定詞）となるため、-nが付加されて、仮にatemnとすると、mの直後にはnは直結できない。従って、atemenとなるが、曖昧母音の連続を嫌うから、atmenの形が形成される。ところが、atm-という語幹からは、atmst、atmtが生成されてしまう。mにも母音が隣接する必要があるので、-t・d終端語幹の動詞と同様、全てに口調のeが入り、atmest、atmet、atmenとなる。

実は、-t・d終端語幹型の動詞はatmen型よりも発音上のeの必要性は少ない。eが必要であるのは、むしろ何かを回避するためである。arbeitenを用いて口調のeを入れない活用を作成すると、arbeitstとarbeitetになる。発音は可能である。arbeitetの場合、発音上は語幹のarbeitと同じである。綴り上では奇妙に見える点がある。長母音に属する二重母音の後に二重子音字がある。二重子音字は前の母音字が広短母音であることの印である。とは言うても、原則通りで発音されうるのであるから、それでよければ、そのような綴りで構わない。ところがそれを忌避して、arbeitest、arbeitetと言う。どのようであってはいないか、この理解が最も基本である。1つには、はっきりと語尾が独立して聞こえなくてはならない。あるいはまた語幹もそのまま聞こえなくてはならない。そのため、クッションとしてeを必要とするのではないか、と考えられる。ところが、母音交替型の強変化動詞ではこの原則が崩れてしまうのである。

reisenのような-s終端型変化は「口調のe」とは直接の関係がない。一般的な記述ではreisen型とarbeiten型が併記され、-eln、-ern型が別パターンとして扱われることが多い。いずれにせよ、色々な動詞の形ということであって、どのような並びであれ、連関が失われることは避けなければならない。語幹終端がs、ß、zであるものは、2人称単数において-stのsを省く。これをただそういうものとして納得する必要はない。どのような事態が避けられているのか、という所へ思考を延ばさなければならない。

reisen、heißen、tanzenを使って状況を考察する。もし、原則通りとすると、du reisst、du heißst、du tanzstになる。このような綴りが回避されている。発音については、当該の綴りにsが加わっても、削除されても変わらない。これは二重子音字ssが関わっていると思われる。本来二重子音字は、単独子音と発音において変わるところはない。二重にすることによって、先行する母音が短音であることを表示し、閉音節であることによって、弛緩音の表示になっている。他の子音が後続すれば、おのずから閉音節になるのであるから、他の子音がないということが二重子音字の前提ということになる。すなわち、二重子音字は母音に挟まれていることが本態である。reisstという綴りは、それに合致しない。長母音に類する二重母音の後のssは一般的ではない。そもそも二重母音の後ろではほぼ不可能であるが、tだけが変化語尾であれば、語尾部分だけに焦点を合わせれば、あり得ないことでもない。しかしこれも、変化語尾部分において、sが新たに加わって、二重子音字化してしまうということはほぼあり得ない。ßはその名の通り、文字としてはsz、発音としてsそのものである。発音上ではheißenはheisenと変わらない(ただし、無声音)。この変化をdu heisstとすると、reisstと同じ矛盾が生じている。tanzenのzは発音としては破擦音、すなわち/ts/であって、sの要素を含んでいる。より発音的に表記すれば、tantsenである。これをdu tantsstと見なせば、前例と同様の矛盾がある。結果としてs、ß、zの後には、sの語尾は付かないということになる。しかし更に思考を延ばせば、ここにこそ「口調のe」を用いればよいのではないかという発想に行きつく。-stを活かすためには独立させればよく、そのためには単独の音節になる必要があり、単に音節化するためにあるのが曖昧母音eである。たしかにその方式も存在する。しかしその方式は廃れた。なにゆえに廃れたか、どういう方向へ向かう傾向があるのか、そこまで思考を延ばせば充分であろう。t・d終端系では人称変化全てにeが挿入されている。s終端系で、eが必要とされるのは2人称単数だけである。1個所にeを挿入することに対して、sの省略が優勢になったということが考えられる。省略して独自の形になるということではなく、3人称単数及び2人称複数に同化してしまう。そのような形でパターンの簡略化が進んだのである。eを挿入するならば、全変化に挿入されるのである。これには自然法則のような必然性はなく、そのように考えれば説明しやすいという仮説なのである。

(3) 強変化動詞の登場

様々な変化タイプの延長上に、強変化動詞が登場する。強変化、弱変化、混合変化の区別が最も問題になるのは、3基本形の学習においてである。実態に即した用語を用いれば、強変化＝母音交替型変化、弱変化＝語尾付加型変化である。混合変化はその両方の性質を兼ねているものであるから、そのまま、まさに混合変化なのであるが、あえて言えば、母音交替語尾付加型変化ということになる。不定詞、過去基本形、過去分詞を3基本形としているから、この区別が必要になるのは、ある程度学習が進んで、時制変換を学ぶときである。現在形学習の途上では、単に不可思議な不規則動詞として振る舞う。不規則動詞の規則性こそが肝心なところである。幹母音がa↔ä、e↔i、と途中交替するものがある。余裕があれば、ö↔iなどの少数派に触れる機会もあろう。

現在時制人称変化の不規則動詞と時制変換の強変化＝母音交替型変化動詞の学習の間に隙間があることがまさに問題である。一般的に後からの学習である時制変換における不規則は、学習者の多くが経験済みである。ところが、現在人称変化における幹母音の交替は、全く見当がつかない。時制変換学習時に、振り返って現在人称変化の幹母音交替を確認、納得することはあろう。しかし、事態はむしろ逆であって、3基本形の母音交替によって、現在人称変化の母音交替を理解するのである。前述の学習の10相のうち、5) 相における訓練において、それぞれの母音交替に習熟するのであるが、時制転換の母音交替と人称変化のそれを結び付けることは、相互の連関を構築する、3) 相の訓練の典型例である。

(4) 命令形の登場

現在時制の人称変化に母音交替型不規則動詞が登場するとほどなく、命令形の登場となることが多い。命令形においては、a↔ä型とe↔i型で変化のあり方に差異が生じるためである。記憶が鮮明のうちに学習を進めたい気持ちがある。

命令形とは不定法、直説法、接続法と並ぶ、命令法の形式ということであるが、2人称だけが対象であって、2人称複数*ihr*に対する命令形は直説法現在と同形であり、いわゆる*Sie*に対する命令は接続法第I式であるから、特別な「命令形」は2人称単数*du*に対する形だけである。それは基本的に語幹である。語幹はその語彙の最も純粋な原点であって、多くの言語にあるような、特別な接辞を付けて命令形とするのではなく、その反対に動詞そのものの核をそのまま放り出すと命令になると言うのはゲルマン系言語の特徴である。むしろ、人称変化語尾などの接辞によって、その他の場合が言わば蓋をされており、訓化されている。

命令形には語幹形とそれに-eを付加した形が用意されている。広い意味ではこれも「口調のe」である。発音上必要なatmeのような例もあるが、多くは自由なオプションとしてのe付加である。基本的動詞は多くが語幹のみの1音節であるか、接頭辞が付いているものであるが、その形では強音はいずれにせよ最後に置かれる。命令形はイントネーションの山を担いたい、最後が強音であると、イントネーションの形は次の語彙に委ねられる。語尾を持つことのメリットは、自己内で強弱を作り出し、次の語彙へのクッションを持つと同時に、イントネーションのコントロールが容易になることである。

反対に、動詞としての語幹内に、幹母音の他に語尾を持つようなタイプは、弱変化動詞であり、このタイプの語幹は本来の動詞性が失われやすい。本来の動詞と言える強変化動詞は、接頭辞を持つものこそあれ、語幹部分は、幹母音からのみ構成された1音節である。多音節の弱変化動詞は動詞性を保つためにかえってeの付加を必要とする。例えば*arbeiten*の命令形2人称単数は*arbeit*でよいが、名詞*Arbeit*と同形であり、動詞性、命令性を明示するためには、eを付加して*arbeite*とするのが最も簡易である。*arbeiten*も当てはまるが、t・d終端語幹型であると、例えば*warten*のような1音節型であっても、e付加形となることが多い。これは人称変化以上に、本来の「口調のe」から離れている。*atmen*などと異なり、命令形として使用するに、語幹形であってもなんの支障もない。それでは、*wart*→*warte*は何を回避しているのだろうか。まさに末端がt・dであることが問題である。t・d共に、発音としてはtであり、これは2人称複数の語尾を想起させる。*wart*という音は、語を創作してしまえば、*waren*、あるいは*warren*といった語の2人称複数形である。人称変化に「口調のe」を伴う動詞は命令形においてもeを付加する、という説明は不十分、あるいは的外れである。

(5) 母音交替型動詞の命令形の問題

ここで、強変化動詞のうち、現在人称変化において母音交替を起こす動詞の命令形が登場する。非常に奇妙なことに、schlafenのようなa↔ä交替の動詞は2人称単数ではdu schläfstであるが、命令形はschlaf(e)となる。一方、e↔i型のgebenでは、du gibstとなり、命令形はgibである。a↔ä交替は人称変化語尾に影響されたものである。e↔i交替も同様に、2・3人称単数語尾によって幹母音が狭くなる現象である。ところが語尾がない2人称単数命令形において、ウムラウトは外れるが、i音はe音には戻らない。

この現象は何を意味するか。ウムラウトはその名の通り変母音であって、二次的なものである。特定の人称変化語尾の付加によって、基本的な母音であるaが二次的な母音であるäに変化した、というのが、最も順当な発想である。ところがe↔i型の場合は、確かに特定の人称変化語尾によって、幹母音がウムラウト型と同じ狭い方向へ移行している。この段階では、iはeのウムラウト形であると言えることができる。しかし、命令形である語幹形においても狭い母音iが保持されている。更に細かく見れば、äは長短共に広いeである。これはaが長短共に本質的に広い母音であることに由来する。a以外は長音は狭い音であり、開音節であれば短音も狭く、閉音節の短母音が広い音である。このことは即ち、ウムラウト型の変化を1段階の変化だとすれば、e↔i型の変化は、基本的に2段階の変化であるということになる。広いほうから、広e→狭e→広i→狭iと並んでいると捉えられる。

このことは、もう一つの関連領域へ思考をいざなうことになる。e↔i型の特殊な現在人称変化として学習する、長e↔短i型変化である。即ちこれは同時に狭e↔広i型1段階変化ということである。その代表はnehmenである。広音と狭音の差異には、前述のように、短音と長音が関係する。広音(弛緩音)はそれだけで系列を作っており、狭音(緊張音)には別の系列がある。狭e↔広i型は同時に長音↔短音型であることを意味する。a↔ä型においては長短ともに広音であるから、1段階と見なせるが、この型は、長↔長、短↔短で揃っており、e↔iの一般型と変わらない。1段階と2段階の差は、長e↔短i型の存在によって生じる。rの母音化による曖昧母音aや、eの曖昧母音の存在を考えるとa↔ä間とe↔i間の距離は同じであるとも考えることができる。現在のドイツ語においては、長短の保持がほぼ行き渡っており、より狭い母音の広音が中間に入るので、2段階に見えるのである。とにかく、隣接音に移行しなければならない。古い形を残す、nehmen型では、母音の長短が揃っていないので、一般型より階梯の幅が小さくなっているようにも見える。

あるいは、aをより積極的に、口を意図的に大きく開ける母音と捉えることもできる。曖昧母音といった、緊張のない母音を原点とみる必要はなく、音の階梯の隙間、空所であっても構わない。e担当の曖昧母音や、母音化されたrの近辺に原点のようなものがあって、積極的に口を開くaは、1段階のみであるので、例えば-1と数値を当てることができる。すると、äにすることは、2段階狭くすること、即ち-1+2=+1となる。

恐らく2・3人称変化語尾は幹母音を狭い方向へ変化させ、次の階梯、即ち、違う文字領域に到達すればよい。その際、長音は狭音である性質を併せ持ち、閉音節の短音は広音である。幹母音は強勢を持つ。強勢がある母音が短音であるということは、その音節は閉音節であって、開音節の母音に強勢があれば、長音のはずである。反対に長音であることは開音節であるか閉音節であるかを問わない。これを階梯から見ると、1階梯であるか2階梯であるかは大きな問題ではなく、むしろ3階梯以上(例えばある短音から、より狭い母音の長音)には飛ばないということが重要である。多くの場合にお

いて、幹母音に限られた法則であるので、開音節であれば長音、閉音節であれば短音に決まり、長音であれば狭音、短音であれば広音となる。この機序が本質的なことである。人称変化の中で、開音節／閉音節の交替は頻繁に起こるが、母音の性質は変更されないのが多数であって、例外的に母音の性質を変えるものが含まれており（性質変更は許されていることになる）、それが長狭 $e \leftrightarrow$ 短広 i 型であるのではないか。

さて命令形に戻る。 $a \leftrightarrow \ddot{a}$ 型においては、人称変化語尾に連動してウムラウトが着脱する。ところが $e \leftrightarrow i$ 型は語尾は幹母音に連動してないように見える。1つの可能性は命令形単数は人称変化の2人称単数形の語幹に合致するのではないか、ということである。いわば命令形も2人称の箱に入っているという感覚である。動詞の変化すなわち「活用」は、不定法、直説法、接続法、命令法の「法」の種別を始め、相、態、時制を備えて、人称に至るが、それぞれを基本にした重なりを想定する価値がある。動詞の活用の中で、人称変化以外は語幹部分の変化であるから、基本的には、人称変化以外のものがベースになり、そのそれぞれが人称変化する、言わば最も表面にある、最終形と考えられる。しかし形式的にも、語尾によって語幹が影響を受けることが起こっているから、より深いところでコントロールしていると考えられる。これはちょうど日本語の動詞系列が、述語本体が文末に来るということと呼応して、前の要素が次に来る要素へ繋がるためにふさわしい形を取るということとパラレルな現象だと言える。従って、人称を最も基本に置く思考を試みる価値がある。

$a \leftrightarrow \ddot{a}$ 型は人称変化語尾の着脱によって変化し、 $e \leftrightarrow i$ 型はまず人称ありきであって、命令形も2人称の内にあると考えるのはある種の煩雑さがある。より統一的な立場を与えるのは音韻である。2人称単数の $-st$ は、語幹の a を \ddot{a} にし、 e を i にしているから、確かに母音を狭い方向へ向かわせている。しかし、語尾のない命令形は a には戻るが、 e には戻らない。ということは、語幹のような理念形は別として、語尾なしの基本形は a と i ということになる。発想を転換して、 $-st$ 、3人称単数の $-t$ が幹母音を狭くしているだけでなく、他の語尾、即ち、 $-e$ 、 $-n$ 、2人称複数の $-t$ は幹母音を広くする性質がある、とすることができる。

これを更に拡張して考えれば、母音の三角形の頂点をなす、 A 、 I 、 U が恐らくもっとも基本的な3原音であり、中間の E 、 O は第1次ウムラウトだと見なしてもよいのではないかということになる。 $E=A+I$ 、 $O=A+U$ 。実際のウムラウトは第2次ウムラウトである。例えば、 $\ddot{A}=A+E$ 、 $\ddot{O}=O+E$ 、 $\ddot{U}=I+U$ という合成である。これには、強変化動詞の過去形において、 e の幹母音を持つものがない（他に二重母音もない）という事実とも関連する。ここでは踏み込まないが、動詞3基本形パターンもこの延長上にある。また、混合変化動詞の3基本形変化、例えば、 $kennen - kannte - gekannt$ も、 $e=\ddot{a}$ の例として考えることもできる。

(6) 母音交替型動詞の口調の問題

再び人称変化へ戻る。まず、命令形から帰納されることは、 $a \leftrightarrow \ddot{a}$ 型であると、命令形は規則動詞同様、 $-e$ を付加することができるが、 $e \leftrightarrow i$ 型では付加することができないという。これも何を意味するかを考えなくてはならない。 e が付加されるのは1人称単数の形と等しいのである。 $e \leftrightarrow i$ 型では等しくならない。本来1人称単数は、何らかの母音的人称語尾が付いていたのであるが、曖昧母音化しているから、例えば命令形にオプションで付けられる e と何らの違いもなくなって来ている。人称変化には現在形パターンと過去形パターンがある。二つの違いは、過去形では、1人称単数、3人称単数の語尾がないということのみである。過去形のこの現象は、1人称単数、3人称単数の区別が曖昧になる（即ち、

対象としての過去の自分)ということであるが、口調のeと同様の性質を持つ、1人称単数現在の曖昧母音eの語尾は、無語尾とのオプションであって、無語尾に等しいのであるが、辛うじて必須になっていることから区別されると言える。

e↔i型で唯一-eが付けられるのは、sehenの命令形siehのみである→siehe。一般に書き言葉で、「○○参照」という意味で使うとされるが、発音されないことはないので、純粹に目で追うだけの単語ではない。sieheの存在によって、e↔i型だからといって、それを理由として-eが付かないわけではないことがわかる。1人称単数形と同じにならなくとも-eが付けられる条件は何か。驚くべきことに、この型で命令形(即ち語幹)が開音節になるのはsehenのみなのである。これが直接の因果関係であるということを取上げて言うことはできないが、sehenを唯一のものにしている性質はこれである。

「口調のe」の問題は、強変化動詞へ差し掛かると、忘れ去られる傾向がある。それほど該当数が多いわけではないので、特殊なものとして、記憶するのが定番であって、むやみに複雑にする必要はないが、全体のシステムを見渡すのにこれほど絶好のチャンスは余りない。a↔ä型でt・d終端語幹の代表例はhalten、e↔i型のそれは、geltenである。haltenの命令形単数はhaltであるから、定石通り、-eを付けてhalteとすることができ、それは1人称単数と同形である。geltenではgiltとなり、こちらは-eを付けられない。人称変化ではhältst/hält, giltst/giltとなる。つまり語幹が変化していると、発音できる場合には「口調のe」を入れない。2人称複数に対しては、haltet/geltetと口調のeが入る。hältの成り立ちはどうか。規則通りに語尾を付加するとすればhältとなり、口調のeを入れればhältetということになる。これでよければ問題ないが、入れてはならない。どうしてか。口調のeは本来の姿を保存するためにあるクッションであって、語尾付加のために変容を被る所には、発音可能であればつけない(このように見える)。口調のeを介さずにhältとすることもできない。二重子音字と同じ事になり、発音上は単純なtと何ら変わることはない。このように綴ってよければなんの問題も生じないのだが、これは嫌われている。ttのような二重子音字のそもそもの役割は、母音間に子音が1つあって、前の母音が広短音であることを示すことである。従って、変化において後の母音が消えても二重子音字はそのままであるが、子音の後に二重子音字が来るのは奇妙な感じを与える。因みに、d終端語幹の代表例はladenである。この場合はlädst/lädtになる。

長e↔短i型でt終端語幹型のほぼ唯一の例がtretenである。短母音化したiに対応する二重子音字でttとなり、その後には人称変化語尾のtはもはや付加され得ないので、trittst/trittとなる。そして、werdenは同じタイプの不規則なのだが、これを唯、単に不規則として扱うのでは発展がない。2・3人称単数はwirst/wirdである。2人称単数においては、dが脱落している。このような音便はhaben→hast/hatで経験している。3人称単数ではdが復活しているように見える。短音になる例を他に見ないから、断定はできないが、もしdが復活しているとすれば、lädtと同じパターンであればwirdtとなるはずである。復活していないとすれば、これは語尾はtの筈だからwirtとなってもよい。しかしこのような形になるのはgiltのような語である。このgiltで分かるように、元の不定詞の形はgeltenである。3人称単数がwirtになる動詞は、弱変化などであればwirenであるし、強変化でもwertenないしwirtenであって、語幹にtを持つ。従って推定とすれば、語幹のdは復活しておらず、habenと同様の2・3人称単数において語幹の末尾が脱落したタイプである。ただしまたま発音がtであったため、語幹のdを綴りとして代用したのだということになる。

このように「ドイツ語リフティング」は次々と続いていくことになる。

註

1) <https://kotobank.jp/dictionary/daijirin/>

この論考は長年触れてきた無数の教科書の記述の経験に基づいている。

特に次の3冊の書籍を優れた参考資料として座右に置き逐次参照した。

中山豊 中級ドイツ文法—基礎から応用まで— 白水社 2008.

中島悠爾 平尾浩三 朝倉巧 必携ドイツ文法総まとめ 白水社 1993.

国松孝二 (編者代表) 他 小学館 独和大辞典 [第2版] コンパクト版 小学館 2000.

